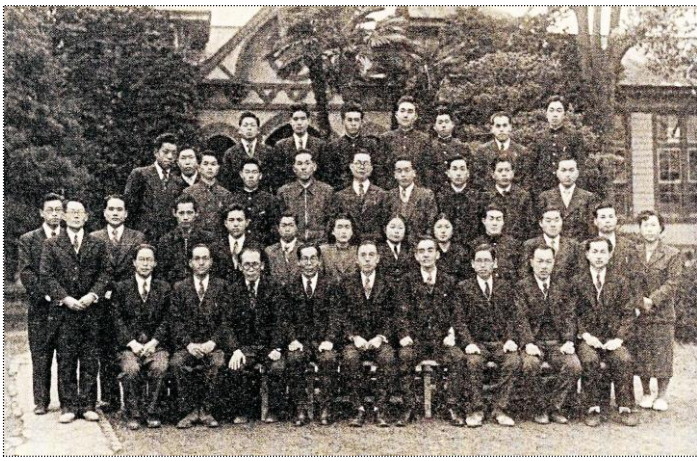




定時制第1回卒業生（1952（昭和27）年3月）

A c a n t h u s

（土浦一高・旧土浦中学とその周辺の物語）



進修同窓会 HP にアクセス

第181号

2024（令和6）年9月10日
茨城県立土浦第一高等学校
進修同窓会旧本館活用委員会
HP <http://www.sin-syu.jp/>

定2回生の修学旅行 1

土浦一高最初の修学旅行は、1952〔昭和27〕年9月、定時制2回生によって実施されました。

今号から、定時制機関誌『星座3号』（1953年3月発行）所収「思い出の修学旅行」（4A 源田光也 併中2回・定2回）を基に、それを綴っていきます。

引用文中の【 】は筆者による注記です。

定時制発足

1948〔昭和23〕年4月1日、新制土浦一高が誕生しました。全日制（定員は1050名）では、旧制土浦中学に1943年度に入学し、旧制中5年を卒業（中48回）した希望者が、高校3年生（高1回）に、同じく1944年度に入学し、旧制中4年修了の希望者が、高校2年生（高2回）希望しなかった者は旧制中5年生に進級、中49回に、1945年度に入学し、旧制中2年を修了し、併設中3年を卒業した希望者が、高校1年生（高3回）に、1946年度に入学し、旧制中1年、併設中2年を修了した者は、併設中3年となりました。その結果、全日制には新制高校生、旧制中学生、併設新制中学生が併存しました。

同時に、定時制（定員は8クラス400名）と通信制（定員は100名も開設されました）。

通信制の入試は、3月20日に実施され、103名が合格し、第1期生となりました。定時制では、第1学年普通科100名の募集が行われ、志願者78名中、女子生徒7名を含む68名が合格しました。5月10日に入学式（入学者は64名）、17日に始業式が挙行され、翌18日から、玄関脇の2教室を使つての授業が開始されました。

しかし、電灯などの照明設備はまだ整備されておらず、授業を思うようにはできません。発足当初の様子を、助川弘定1回（1997〔平成9〕年発行『進修百年』）に、「定時制の創立」と題して、次のように記しています。

「……。残念なことに当時はまだ電灯設備が設置されておらず、夏の日の高いうちでも五時から七時頃までの授業で、正課の九時十分までは勉強をしたくても暗くて出来ませんでした。九月末にや」と電気がついて授業ができるように

なりましたが、電力事情が悪くしばしば停電に見舞われました。そうすると黒板の字が見えませんでした。暗い教室にろうそくを灯して先生のお話だけを伺いました。……。」

その後、1949年度96名、1950年度101名、1951年度93名の入学生を迎え、各学年2クラス、4学年が成立し、職員も専任12名、事務1名、用務手1名の陣容が整えられました。

1952年3月9日（日曜日）、開設当初の不備な施設・設備の中で、向学心に燃え、苦勞を重ねて、仕事と学びとを両立させてきた生徒たちが、卒業を迎えることになりました。第1回卒業式が午前10時から挙行され、卒業生28名（うち女子生徒3名が単立つていました）。その後、第2回53名（女子6名）、第3回54名（同10名）、第4回52名（同12名）の卒業生が続き、第2回以降は、少数ながら大学に進学する者も見られるなど、定時制教育も徐々に軌道に乗り、その成果も目に見えて現れるようになってきました。

旧制中、併設中、定時制—真鍋台の7年—

1946年に最後の旧制土浦中学生として入学した源田光也（併中2回・定2回）は、戦後の、旧制から新制への教育改革期に、7年間、真鍋台で学びました。その移行期の様子を『進修百年』に、「AKA・ONI：羽方稔先生の思い出」と題して、次のように述べています。

「……。私達がこの学校『旧制土浦中学』に入学したのは、この世に生を受けて以来、戦争に明け暮れた時代が、我が国の史上初めて経験する敗戦と云う形でや」と終わった約半年後の昭和二十一年の春でした。暗い混沌とした世情とは裏腹に、特に私は、大方の人達より二年後

れて、ようやく憧れの土浦中学に入学出来た喜びに胸を弾ませて、桜花爛漫たる校門をくぐりました。当時は学生の服装もまちまちで、多くの者は、海軍の戦闘帽に白線を二本巻いて学帽とし、道で先生に会った時は、海軍式の敬礼をするように指示されていました。校庭の隅には未だに防空壕が残っており、上級生の中には軍隊帰りの人達も大勢おりました。揭示された私の組は一年五組、担任の先生は「羽方稔」【英語 在籍1939〔昭和14〕年〜1973〔昭和48〕年】とありました。

……。やがて私達は、新学制により併設中学の二年生となったが下級生は入学せず、最下級生のまゝ三年間の学生生活を終了しました。いわゆる、史上、二年しか存在しない、その併設中学二回卒業生となりました。ほとんどの者は、そのまゝ現在の一高に進学【高4回】しましたが、一部の人はそこ【併設中】で学業を終えて就職し、又ある者は他の高校【都立高が多かった】へ進学しました。私は父を亡くし、経済的な事情から数名の同級生と一緒に、三年間一緒に学んだ皆んなに別れを告げて前年度に制定された【発足した】本校の定時制に進みました。その頃実施されていた夏時間制のため、未だ陽の高い真鍋の坂を、その途中にある羽方先生の家の前を通って、汗だくになりながら、勤務先から学校へ直行しました。初めの頃は、途中で行き交う、ついこの間までのクラスメートと顔を合わせるのが辛く、やゝもすれば暗い気持ちにもなりがちでした。しかし、それぞれ職業も、年齢もまちまちの人達が、学ぶ、と云う同じ目的のために、夜、一堂に会する、そんなひたむきの姿に、自分の甘い気持ちもいつしか消え失せてゆきました。

そして創立以来男子校であった本校に、定時制だけ少数ながら素敵な女生徒を迎えて、新たな青春の息吹きを感じ、それにもまして何より心強かったのは、引き続き、羽方先生、土井【鱗助】先生【数学 在籍¹⁹⁴³年〜¹⁹⁷⁰年】が授業を担当して下さったことでした。

……。本校百年の歴史の中で、旧制中一年、併設中二年、定時制四年と在学した私にとって、七年間の思い出は尽きることを知りません……」

土浦一高初の修学旅行

本校では、旧制土浦中学開校翌年の¹⁸⁹⁸「明治31」年に実施された、中1・2回生による修学旅行を皮切りに、以後、学年毎に、主に、県北、東京、鎌倉・横須賀、日光、箱根を訪れ、¹⁹¹⁶「大正5」年からは、5年生が関西への旅行をするようになりました。しかし、アジア太平洋戦争の戦局悪化のため、¹⁹⁴²年中42回生の聖地巡拝旅行を最後に、修学旅行は実施できなくなりました。

戦後、土浦一高が発足しても、修学旅行は復活しませんでした。戦後の経済事情が悪かったこともありですが、先生方の反対が大きかったようです。先生方は、学徒勤労動員で学びの時間が奪われ、教えたくても教えられなかった経験を踏まえ、何より、学びの時間が貴重だと考えられたのでしょう。加えて、6泊7日或いは7泊8日（うち少なくとも1泊は車中泊で、伊勢、奈良、大阪、京都と巡る旅は、永山正先生（社会 在職¹⁹²⁵「大正14」年〜¹⁹⁶⁵「昭和40」年）が、「修学旅行の引率を終えて帰ってくると、きまっで一貫目^{3.75kg}も痩せてしまった。」と言われたように、引率の先生方にとっては、並大抵のものではありません。これが、戦後、

土浦一高に修学旅行が復活しなかった最大の要因であったと思われます。また、全日制の生徒たちは、大学受験を考えると、修学旅行が無いのは仕方がない、当たり前だ、と考えていたようです。

こうした状況の中で、源田たち定2回生が、¹⁹⁵²年、4年生次に土浦一高初の修学旅行を実現させたのです。

定2回生たちで修学旅行をやりたい、という希望は、1年生の頃から出ていて、積立などをしたこともありましたが、その熱は長続きしませんでした。本格的にやり出したのは3年中頃で、当時の4年生の旅行が、費用の点で失敗したことを知り、また、4年生や先生方からの助言もあつて、希望者が相談して積立を始めました。

A組は金の出来次第（但し100円以上何時でも、B組は月々一定の金額を、責任者に預けることとしました。4年生の春を迎えると、他の学校が旅行をするようになり、定2回生の間にもそうした話が出始めました。親睦を深めるために、伊東辺りの温泉へ行つて、2晩もゆつくり楽しもうか、大島へ行こうか、どうせ行くなら、学校からでなければ滅多に行けない所、即ち、関西が良い、などとさまざまな意見が出てきました。しかし、それが実現できるとは思いませんでした。学校側では、修学旅行など、全く考えられないことであつたからです。

そこで、源田は、旧制中からの顔の広さを生かし、一高事務職員の黒澤近（定2回）と組んで、先生方の説得に当たりました。

校訓の「自主」を逆手にとつて、先ず、長南俊雄教頭【国語 在職 教諭¹⁹³⁹年〜¹⁹⁴⁹年、教頭¹⁹⁴⁹年〜¹⁹⁵³年、校長¹⁹⁶⁴「昭和39」年〜¹⁹⁶⁵年】を口説き落とし、「俺達、親のスネをかじ

つて行くわけじゃない。」と、数人で積み立てた預金通帳を持参して、渡辺文彌校長【在職¹⁹⁴⁹年〜¹⁹⁵⁵「昭和30」年】に直談判するなど、学校側に縋々訴え続け、ついに旅行を認めてもらいました。

学校の許可が下りると、源田たちは直ぐさま準備を始めました。期日は、少々暑いが身軽で行けるし、日曜と祭日が続くから勤務の都合からも、9月20日〜23日が良いだろうという意見が、10月或いは11月を希望する組に勝ち、行く先も関西方面に落ち着きました。しかし、参加者が県の許可基準にまだ達していません。県の規定では、参加者が総員の80%以上なければならず、日数も3泊4日以内となっていました。そのため、2組合同で何回もホームルームを開き、先生方にも参加を勧めていた。7月半ばには、人員も何とか揃いました。大平浩先生【国語 在職¹⁹⁵⁰年〜¹⁹⁶¹年】が、土浦駅へ相談に行つて、改札主任の方が万事を引き受けてくれることになりました。また、土浦駅勤務の野沢良佑（定1回）も、いろいろと骨を折ってくれました。しかし、コースも決まつて、旅行まであと一ヶ月足らずという時に、思い掛けない事が起こりました。万事引き受けてくれたいた主任さんが、上野駅へ転任になるのです。何度も連絡しましたが、「今夜は行く」と言いながら、現れません。それが2度3度と続き、期日も迫り、源田たちはあわて出しました。その間にも、皆の間には旅行熱が高まり、参加者も増え、積立金も急激に増えてきました。今、この事態を知らなければ、折角燃え上がった処に水を掛けるようなものだ、一刻の猶予も許されない、と池井芳寛先生【理科 在職¹⁹⁵⁰年〜¹⁹⁷²「昭和47」年】が、直接、交通公社へ掛けに行つてくれました。その結

果、この分ならどうやら間に合う、という見通しが付きました。公社と数回の連絡の後、明細も分かり、県の許可も下りました。9月も中旬に入ると、残すところ2週間弱、人員も確定して、旅行気分はいやが上にも高まり、生徒たちは、授業中の先生に、関西の話などを盛んにねだっていました。

1学期試験【当時は2学期制】が終わると、あとはその日を待つばかりです。池井先生が、立派な「関西めぐり」なるプリントを作成してくれました。本来ならば生徒がすべきところですが、勤務のことを思つて、全てを先生方が代わつてやってくれました。一人当たり²⁴⁰⁰円の費用も集まり、持参する米も5合づつ2袋、計1升としました。

校長先生も、わざわざホームルームに來られて、「この学校は、修学旅行を今でも全日制には許していない。が、定時制は自分で働いていることでもあり、今までの苦勞の報いにもと思ひ、特別に許可するのであつて、いわば試験的な旅行であり、今度の結果によつて今後の旅行の是非が決まるのであるから、立派に楽しんで来るように。」と、食事から衣服に至るまで、親身も及ばぬ注意を与えてくれました。この話で、ともすれば浮き立ちがちであつた生徒の心に、「しっかりしなければ、……」との決意が宿つたようでした。

続いて、清水繁次郎先生【国語 在職 教諭¹⁹²⁸「昭和3」年〜¹⁹⁴⁸年4月、定時制主事¹⁹⁴⁸年5月〜¹⁹⁶⁴「昭和39」年】が、「小遣いは500円程度。」と言うと、皆からどつと笑いが起こりました。恐らく、それぞれが、その何倍をも既に用意していたのでしょう。